

## 目で聴くコミュニケーション研修

聞こえない人の理解のために



「聞こえない体験」の様子(耳栓・ヘッドホンを装着)



「聞こえない人とコミュニケーションをとろう」の様子

### ■目で聴くコミュニケーション研修

弊社では、聞こえない人との間のバリアをなくすことを目的とし、少しでも多くの人にご理解いただくために、体験中心の「目で聴くコミュニケーション研修」プログラムを、聴覚障がいのある社員が制作しました。聞こえない状態の体験を通してそこにおかれる当事者の気持ち、音の聞こえ方、得られる情報量、コミュニケーションの難しさを学習できるようになっています。

具体的には、耳栓をした上でヘッドフォンをして聞こえない状態を作り出す「聞こえない体験」、聴覚障がい当事者の体験談を含んだ「聞こえないことについての講座」、ゲーム形式で「当事者と直接コミュニケーションをする等」の内容を取り入れ、子供から大人まで楽しく分かりやすく学習していただける内容となっております。本研修を受講することにより下記の3つのメリットがあります。

1. 聞こえない状態の疑似体験を通し、子供から大人まで楽しく、わかりやすく理解できます。
2. 当事者と直接コミュニケーションをとることが出来ます。
3. 当事者の日常生活や生活上で困っていることを学べます。

聞こえない人が困っていたら、あなたはどうしますか？  
友人、同僚や部下に聞こえない人がいたらどうしますか？  
自分自身が、突然聞こえなくなったらどうしますか？

「どのように声をかければよいか」「何を具体的にサポートすればよいか」「どのように接すればよいか」わからないという答えが返ってくるのではないのでしょうか。

これは聞こえない人について学ぶ機会または触れ合う機会が少ないために、コミュニケーションをより難しくさせているということだと思います。

### ●「人に向かって指さすことはマナー違反である」

手話の世界では、指さしも立派な手話単語の一つです。相手が友人でも同僚でも上司でも、どんなに偉い人でも指をさします。

聞こえない人に対する誤解をなくし、自然に声をかけ、接し、サポートするためには、頭で理解する前にまず、聞こえない世界に入り、聞こえないこととはどういうことかを自ら体験することが一番の近道です。

### 【聞こえない人への誤った理解や習慣の例】

#### ●「声を大きくすれば伝わる」

全く音が聞こえないという人、音が歪んで明瞭に聞こえないという人、補聴器を使用しても音の判別が難しい人等、一人ひとり聞こえ方に特徴がありますので、必ず伝わるわけではありません。

#### ●「筆談をすれば伝わる」

聞こえない人は育ってきた環境によって、日本語が苦手な人もいます。その人に合ったコミュニケーション方法をとる必要があります。

研修カリキュラム例	所要時間	内容
オープニング	5分	研修の趣旨、スタッフ紹介、実施内容の説明します。
体験1 聞こえない体験	25分	ヘッドホン装着し、ホワイトノイズを流した状態で講師やスタッフの話を聞き、聞こえない体験をします。
体験2 口の動きの読み取り	5分	講師の(声なし)口の動き見て、何を言っているか当ててもらいます。
体験3 口の動きだけで伝言	10分	与えられた言葉を、チーム内で(声なし)口の動きのみで伝言ゲームを行います。
休憩		
講座 聞こえないことは?	15分	聞こえないことの基本知識、コミュニケーション方法、生活で困っていることや工夫していること等、障がい当事者からの講座を行います。
体験4 聞こえない人とコミュニケーションをとろう	25分	これまでの体験と知識をもとに、聞こえない人とのコミュニケーションを実施します。
振り返り	5分	今後、聞こえない人と会ったらどのようにしていくか振り返りを行います。

チラシはこちらへ URL <http://www.ntt-claruty.co.jp/img/business/medekiku.pdf>

### NTTクラリティ商品紹介



## 手から手へ、心に残る「はじめまして」

### —手渡し名刺のご紹介—

人と人の繋がりが生まれる名刺交換。  
大切な出会いのシーンに、手渡し紙の名刺はいかがですか？  
やわらかい手触りは、あなたのあたたかい人柄を伝えてくれます。  
また、山梨県・塩山ファクトリーのメンバーによって、1枚1枚心を込めてつくられた名刺は初対面の方との会話のきっかけにも。  
手作りの名刺が、心に残る出会いをお手伝いします。

お問い合わせ  
営業部 新規事業推進担当(小林、新井田、佐藤)  
TEL:011-200-0018  
Mail:inquiry-sapporo@ntt-claruty.co.jp



クルマだって、  
乗りたければ、  
乗ればいいじゃん。

写真: 河野 豊

## 対談 太田哲也(自動車評論家・レーシングドライバー)×遠藤大嗣(NTTクラリティ)

**大きな事故に遭い、生死の境をさまよう。気の遠くなるような時間をかけ、やっとの思いで死の淵から生還する。でも、それはゴールじゃなかった。スタートだった。劇的な生還から、平凡で長く続く日常へ。どう生きるのか、なにを生きるのか。二人の男が、語り合った。**

### 右足を切断されてからとった国内Aライセンス

**遠藤** 遠藤大嗣といいます。大学四年生の時、バイクで事故に遭ってしまっ。かなり大きな事故で、右足の大腿部から切断、左足膝下10センチから開放性骨折。さらに、左手の前腕が骨折や脱臼、軟骨損傷。手首・ひじの動きに障がいが残ってしまいました。

**太田** それはいつ頃のことですか？

**遠藤** 23歳の時ですから、今から12～13年ほど前になります。

**太田** じゃあ僕の事故(※1)よりも後ですね。僕の事故は1998年ですから。

**遠藤** 私が事故に遭ったのは2002年ですね。で、事故の後、まず1年半くらい入院をして。そのあと入院を繰り返しながら、合計で7年ほど治療を続けました。その後、NTTクラリティに勤務することになるのですが、大学時代にやっていたバイクレースに、もう復帰できないという

ことが、治療の間にはっきりわかってきて。

**太田** それは物理的に、それとも精神的に？

**遠藤** 物理的にですね。右足の股関節下15センチくらいから切断していて、義足なんて、普通のバイクに乗るのは無理なんです。でも、二輪は無理だけど、四輪だったらサーキットに戻れるのかな、と思って、リハビリの途中だったんですけど、とりあえず「国内Bライセンス」(※2)を取って。でも、Bライセンスで出られるレースは、自分のやりたいものとは違うので、やっぱり「国内Aライセンス」を取りたいなど。

それがJAF(日本自動車連盟)に申請を出したのですが、これだけの障がいを持ちながらAライセンスを取った人は過去にいなかったらしくて、安全面から拒否されてしまっ。でも諦められなくて、それで1年半くらいBライセンスで出られるレースで実績を作りながら、オフィシャルの活動を手伝って、改めて嘆願書を出したら、許可が出た。Aライセンスを取ることができたんです。

その時すぐにレースに出ようかと思ったんですけど、

僕も30歳に近くになっていて、親の顔や、付き合っている彼女の顔も思い浮かべると、Aライセンスを取ってスタートラインには立てたからということで、また治療に専念して。その後30歳になる時に就職して、今に至ります。スケールやレベルは全然違いますけれど、太田さんが事故に遭われて、いろいろな苦難を乗り越えて今に至るまでの過程に、僕はとても勇気づけられてきました。なので、今日お会いできることを、すごく楽しみにしていました。

### 命が助かっても人生はまだまだ続く

**遠藤** 一冊目の本「クラッシュ」も、壮絶な事故からの回復の過程を追っていて、とても共感できたのですが、むしろ、サーキットで走行できるまでに回復してからのご自身について書かれた、二冊目の「リバース」のほうが、心に残りました。

**太田** そうですか。そういうことを言うくださるのは、男性が多いんですよ。ドラマだったら「命が助かった、よかった」ってエンディングを迎えてくれるんだけど、実際はその後も、人生はまだまだ続くんですね(笑)。「リバース」で僕が書こうとしたのは、「居場所がない」ことの恐ろしさ、ということなのかもしれない。

身体がある程度回復した時、社会にとって自分が必要ないかもしれないと気づいて、僕は非常に恐ろしかった。社会に自分が戻っていく場所がないと、自分はどうなってしまうだろう。『リバース』の時代は、そこが一番きつかったかもしれないですね。

**遠藤** 『クラッシュ』を読んで「終わった」と思ってたんですけど、「リバース」を読んだ時には「終わってなかった。これは、はじまりだったな」って(笑)。

**太田** 遠藤さんは事故の時、大学生だったわけですよね。治療をしながら、どこに「戻る」のか、楽しい世界に戻るのか、それともどうやって社会に入っていくかを考えるのか。やっぱり僕と同じような悩みを抱えたんだと思いますよ。

**遠藤** おっしゃる通りです。僕の場合、バイクを通じて人と人とのつながりを広げていくのがすごく楽しかった。それができなくなるのがつらかったんです。事故に遭った時は、自分が戻る場所は、就職じゃなくて、以前のた、バイクレースの楽しい世界だと思っていました。でもAライセン

スまで取ったとき、これから長い人生を送る上で、就職もしてないし、このままじゃマズいな、って思ってた。そこではじめて、就職をしよう、社会と繋がろうということを考えて。

**太田** 僕もそんなにレースにこだわっていたわけではないんですよ(笑)。あくまでも職業としてやっていたわけ

です。だから、レースに戻りたいというよりも、職業人に戻りたい気持ちが強かった。でも40歳からなんの仕事ができたのかっていったら、これまでレースしかしてないわけですよ。だから職業を得るにはレースが一番簡単だ、って思っていたんですよ。

考えてみればレースになんて戻れっこないんです。プロって、すぐぐまいやつがいっぱい集まって、コンマ1秒を争ってるわけです。でもどうしても体に奇跡が起こるんじゃないかとか、アメリカで研究結果が発表されるんじゃないかとか、どこかに期待がずっとあったんです。

ところが、一回サーキットを走った時、意外とうまく走れた。自分が戻る場所は、就職じゃなくて、以前のた、バイクレースの楽しい世界だと思っていました。でもAライセン



い。昔よりメンテナンス遅れてしまう。レースの職業は無理だな、別の職業を見つければよと思って書いたのがこれ(『クラッシュ』)なんです。だから、この本は自分の新しい仕事として書いたんです。遠藤君と似ていると思ったのは、無意識のうちに職業に入っていくかといけない、って思っていたところ。僕も同じですよ。そういう意味では、**遠藤** なるほど。

### 自分が社会に通用するのか、必要とされているのか

**太田** レースって、自分の思いだけじゃ、うまくいかない。大切なのは、他人に認めてもらうことです。チームやスポンサーから認められてはじめてお金が出て、それでレースができる。学生のころは自分の思いだけで突き進んでいけるけど、社会に出ると、相手の思いで自分が採用されるかどうかが決まる。すると自分が「通用するのか」っていう視点で見えてきますよね。

それで言ったら、事故の後の僕は、ダメだな、ダメだな、ダメだな(笑)。じゃあ、なにがあるんだ、ダメなら終わりじゃなく

スまで取ったとき、これから長い人生を送る上で、就職もしてないし、このままじゃマズいな、って思ってた。そこではじめて、就職をしよう、社会と繋がろうということを考えて。

**太田** 僕もそんなにレースにこだわっていたわけではないんですよ(笑)。あくまでも職業としてやっていたわけ

です。だから、レースに戻りたいというよりも、職業人に戻りたい気持ちが強かった。でも40歳からなんの仕事ができたのかっていったら、これまでレースしかしてないわけですよ。だから職業を得るにはレースが一番簡単だ、って思っていたんですよ。

考えてみればレースになんて戻れっこないんです。プロって、すぐぐまいやつがいっぱい集まって、コンマ1秒を争ってるわけです。でもどうしても体に奇跡が起こるんじゃないかとか、アメリカで研究結果が発表されるんじゃないかとか、どこかに期待がずっとあったんです。

ところが、一回サーキットを走った時、意外とうまく走れた。自分が戻る場所は、就職じゃなくて、以前のた、バイクレースの楽しい世界だと思っていました。でもAライセン

スまで取ったとき、これから長い人生を送る上で、就職もしてないし、このままじゃマズいな、って思ってた。そこではじめて、就職をしよう、社会と繋がろうということを考えて。

**太田** 僕もそんなにレースにこだわっていたわけではないんですよ(笑)。あくまでも職業としてやっていたわけ

です。だから、レースに戻りたいというよりも、職業人に戻りたい気持ちが強かった。でも40歳からなんの仕事ができたのかっていったら、これまでレースしかしてないわけですよ。だから職業を得るにはレースが一番簡単だ、って思っていたんですよ。

考えてみればレースになんて戻れっこないんです。プロって、すぐぐまいやつがいっぱい集まって、コンマ1秒を争ってるわけです。でもどうしても体に奇跡が起こるんじゃないかとか、アメリカで研究結果が発表されるんじゃないかとか、どこかに期待がずっとあったんです。

ところが、一回サーキットを走った時、意外とうまく走れた。自分が戻る場所は、就職じゃなくて、以前のた、バイクレースの楽しい世界だと思っていました。でもAライセン

スまで取ったとき、これから長い人生を送る上で、就職もしてないし、このままじゃマズいな、って思ってた。そこではじめて、就職をしよう、社会と繋がろうということを考えて。

**太田** 僕もそんなにレースにこだわっていたわけではないんですよ(笑)。あくまでも職業としてやっていたわけ

です。だから、レースに戻りたいというよりも、職業人に戻りたい気持ちが強かった。でも40歳からなんの仕事ができたのかっていったら、これまでレースしかしてないわけですよ。だから職業を得るにはレースが一番簡単だ、って思っていたんですよ。

考えてみればレースになんて戻れっこないんです。プロって、すぐぐまいやつがいっぱい集まって、コンマ1秒を争ってるわけです。でもどうしても体に奇跡が起こるんじゃないかとか、アメリカで研究結果が発表されるんじゃないかとか、どこかに期待がずっとあったんです。

ところが、一回サーキットを走った時、意外とうまく走れた。自分が戻る場所は、就職じゃなくて、以前のた、バイクレースの楽しい世界だと思っていました。でもAライセン

スまで取ったとき、これから長い人生を送る上で、就職もしてないし、このままじゃマズいな、って思ってた。そこではじめて、就職をしよう、社会と繋がろうということを考えて。

**太田** 僕もそんなにレースにこだわっていたわけではないんですよ(笑)。あくまでも職業としてやっていたわけ

です。だから、レースに戻りたいというよりも、職業人に戻りたい気持ちが強かった。でも40歳からなんの仕事ができたのかっていったら、これまでレースしかしてないわけですよ。だから職業を得るにはレースが一番簡単だ、って思っていたんですよ。

考えてみればレースになんて戻れっこないんです。プロって、すぐぐまいやつがいっぱい集まって、コンマ1秒を争ってるわけです。でもどうしても体に奇跡が起こるんじゃないかとか、アメリカで研究結果が発表されるんじゃないかとか、どこかに期待がずっとあったんです。

ところが、一回サーキットを走った時、意外とうまく走れた。自分が戻る場所は、就職じゃなくて、以前のた、バイクレースの楽しい世界だと思っていました。でもAライセン

スまで取ったとき、これから長い人生を送る上で、就職もしてないし、このままじゃマズいな、って思ってた。そこではじめて、就職をしよう、社会と繋がろうということを考えて。

**太田** 僕もそんなにレースにこだわっていたわけではないんですよ(笑)。あくまでも職業としてやっていたわけ

です。だから、レースに戻りたいというよりも、職業人に戻りたい気持ちが強かった。でも40歳からなんの仕事ができたのかっていったら、これまでレースしかしてないわけですよ。だから職業を得るにはレースが一番簡単だ、って思っていたんですよ。

考えてみればレースになんて戻れっこないんです。プロって、すぐぐまいやつがいっぱい集まって、コンマ1秒を争ってるわけです。でもどうしても体に奇跡が起こるんじゃないかとか、アメリカで研究結果が発表されるんじゃないかとか、どこかに期待がずっとあったんです。

ところが、一回サーキットを走った時、意外とうまく走れた。自分が戻る場所は、就職じゃなくて、以前のた、バイクレースの楽しい世界だと思っていました。でもAライセン

スまで取ったとき、これから長い人生を送る上で、就職もしてないし、このままじゃマズいな、って思ってた。そこではじめて、就職をしよう、社会と繋がろうということを考えて。

**太田** 僕もそんなにレースにこだわっていたわけではないんですよ(笑)。あくまでも職業としてやっていたわけ

です。だから、レースに戻りたいというよりも、職業人に戻りたい気持ちが強かった。でも40歳からなんの仕事ができたのかっていったら、これまでレースしかしてないわけですよ。だから職業を得るにはレースが一番簡単だ、って思っていたんですよ。

**太田** 友人で、青木拓磨っていうロードレーサーがいたんです。彼は今、車いすなんですけど、二輪から四輪に転向してレースに出場している。遠藤さんと同じで、ライセンスがもらえなくて、日本じゃ取れないから、国際ラリーに出て。今GTアジアっていうレースに出てますよ。この間、優勝したって言っていました。

僕たちがサッカーの選手だったら、もうどうにもならないけど、クルマだとハンディキャップがあってもどうにか。そういう意味ではラッキーだな、って(笑)。

**遠藤** すごいポジティブですね(笑)。

**太田** 青木拓磨選手なんかは、レースに出られるのが楽しくたまらないんだって。もう一人、伊藤真一という友人もいるんです。彼もホンダのワークスライダーだった。彼はレース中に転んで、股関節と骨盤を損傷してしまって、人工関節を入れたんです。退院直後、サーキットで会ったら「太田さん、何級ですか?」って聞かれたの。身体障がいの等級は僕の方が上だったんだけど、そしたら「残念!負けた!」って(笑)。彼のがちょっと低かったんです(笑)。「で、これからどうするの?」って聞いたら、「やりますよ、レース」って、それで彼の復活レースは、僕がお膳立てしたの。その後、二輪の8時間耐久とかに出て、ポールポジションを取ったりしているんですよ。

**遠藤** なんて続けるんでしょうね。

**太田** 僕の場合は職業の意識が強くて、好きだったかどうかって、よくわからないんです。ル・マン(※4)とかは、時速370キロぐらい出るんだよね。夜中だよ。「冗談じゃねえよなあ」、「たまねえよなあ」って思いながら、でもアクセル踏まなきゃいけないわけですよ。

**遠藤** ええ…(笑)。

**太田** だって危ないじゃない、どう考えたって。華やかだし、お金もらえそうだな、と思ってレースの世界を職業に選んだけど、高性能マシンで、選ばれた人しか参加できないレースに出るからこそ、お金ももらえるわけ。

**遠藤** なるほど。

**太田** まあでも、彼らと似ているのは、自分もできる範囲では乗りたいっていうのはありますね。「これだけできる」っていうのを、自分にも、周りにも見せたい。動く限りはやるぞ、って思いますね。

**遠藤** なるほど。

**太田** まあでも、彼らと似ているのは、自分もできる範囲では乗りたいっていうのはありますね。「これだけできる」っていうのを、自分にも、周りにも見せたい。動く限りはやるぞ、って思いますね。

**遠藤** なるほど。

**太田** まあでも、彼らと似ているのは、自分もできる範囲では乗りたいっていうのはありますね。「これだけできる」っていうのを、自分にも、周りにも見せたい。動く限りはやるぞ、って思いますね。

**遠藤** なるほど。

**太田** まあでも、彼らと似ているのは、自分もできる範囲では乗りたいっていうのはありますね。「これだけできる」っていうのを、自分にも、周りにも見せたい。動く限りはやるぞ、って思いますね。

**遠藤** なるほど。

**太田** まあでも、彼らと似ているのは、自分もできる範囲では乗りたいっていうのはありますね。「これだけできる」っていうのを、自分にも、周りにも見せたい。動く限りはやるぞ、って思いますね。

**遠藤** なるほど。

**太田** まあでも、彼らと似ているのは、自分もできる範囲では乗りたいっていうのはありますね。「これだけできる」っていうのを、自分にも、周りにも見せたい。動く限りはやるぞ、って思いますね。

**遠藤** なるほど。

**太田** まあでも、彼らと似ているのは、自分もできる範囲では乗りたいっていうのはありますね。「これだけできる」っていうのを、自分にも、周りにも見せたい。動く限りはやるぞ、って思いますね。

**遠藤** なるほど。

**太田** まあでも、彼らと似ているのは、自分もできる範囲では乗りたいっていうのはありますね。「これだけできる」っていうのを、自分にも、周りにも見せたい。動く限りはやるぞ、って思いますね。

**遠藤** なるほど。

**太田** まあでも、彼らと似ているのは、自分もできる範囲では乗りたいっていうのはありますね。「これだけできる」っていうのを、自分にも、周りにも見せたい。動く限りはやるぞ、って思いますね。



いけど、遠藤さんはおしりの感覚はあるわけでしょ? お尻で横Gを感じたり、体を支えたりするわけだから、条件はいいよね。僕のドライビングスクールにも、時々車いすの人が来ますけど、普通に走ってますよ。

**遠藤** 私はまだまだですか(笑)。

**太田** 走れると思いますよ。もちろん、多少の努力と機械の調整は必要でしょうけど。

長屋宏和君っていうF3(※4)のドライバーがいて、彼は頸椎をやられて首から下が動かないんですけど、それでもカートやってますからね。

長屋君が事故の後、はじめてカートを走るっていう時に僕も観にいったんだけど、お母さんがいらして。その時「息子さんが走ると、また事故に遭うかもしれない、怖いって思いませんか?」ってあえて聞いたんです。そしたら「また事故に遭う怖さよりも、なにもチャレンジしなくなっちゃうことの方が怖いから、だからうれしいですよ」って。

僕はそうおっしゃるんだろうなと思って聞いたんです。結局、ハンデを持っているからって、それをしない理由にしちゃうのはよくないかな、って思う。

**遠藤** 僕は家族のこともあって今はレースをやってないんですけど…。

**太田** 家族のことを考えたらそんなことやっちゃいけないって? どうだろう、そこにいるけど、篤子～。(ここで奥様の篤子さん登場!)

**篤子さん** はい。

**太田** キミへの質問だけ。俺がレースをやるとか、また走るって言ったときに、キミは嫌じゃなかったのかな?

**篤子さん** あんまり嫌じゃなかったです。ただ子どもにレースをすすめるのはやめてほしかったですね。

**遠藤** (笑)。太田さんがやるのはいいいけど、子どもは、ってことですか?

**篤子さん** いっていいけど、疑いもしなかったですよ。サーキットに戻るっていうことを、むしろ戻ることが回復の

一番だと思ってました。ただ、子どもにすすめるのは、意味わかんなかった。

**太田** いや、すすめているっていうか…。

**篤子さん** やっぱりクルマの業界に入ってきてほしいっていう、レースやってほしいっていうのがすごくありましたね。今はもうあきらめたみたいですよ。

**遠藤** 僕も、すぐレースをしたいです。ただ治療中から付き合いはじめた彼女と、最近結婚したんですけど、彼女は20代を僕の治療に費やしてくれたんです。普通の人と比べたら、いろいろ我慢してたのかな、って思うと、レースはいったん置いておいて、今は一生懸命働いて彼女を安心させようかな、って思ってます。

**太田** もちろん遠藤さんがこれからプロを目指すっていうんなら、それは止めますよ(笑)。でも、クルマに乗りたいたら乗ればいいじゃん、って思います。生活が崩れてしま

ならやめておいた方がいいけど、両立できるんなら、やりたいいいじゃん、って思います。プロと違って安全範囲でやればいい。彼女はやってほしくない、って言うのかな?

**遠藤** 口には出さないとしますが、嫌がると思います。

**太田** でも自分の人生なんだから、彼女に相談してみれば、って僕は思う。人生って、誰かのために生きてるって思っても、その「誰か」にとってはそれが重荷だったり

することもありますよね。「お前のためにずっと我慢してたんだぞ」って言われたら、彼女にしてみたら「そんなこと頼んでないよ!」みたいな話になるかも。

**遠藤** おっしゃるとおりですね。

**太田** やりたいならやればって。そうやってイキイキしてる方が、周りの人も喜んでくれる場合もあると思うよ。僕だって、なにもしないでいたら、引きこもってたんじゃなくなっ

て思うんですよ。リスクを全部クリアしようとしたら、前に進めない。だから様子を見ながらやってみて、失敗したら方向を変えればいいって思う。

**遠藤** レースが楽しんでしょうがない時に事故にあったから、その世界に戻ったら、また周りが見えなくなっちゃう怖さもありますよね。

**太田** 僕はレース中は、マシンになる。家族のことなんか一切考えない。考えてたでできないからね。でも無事に帰ってきたときはいつも、家族がいてよかったなあ、って



思っていましたよ。だから、遠藤さんがレースをしたら、もしかしたら奥さんに優しくなるかもしれないよ(笑)。

**遠藤** なるほど。

**太田** 今1～2年我慢するのはいいと思うんだけど、一生我慢することはないんじゃない。生活が安定して、給料がたくさんもらえるようになったら(笑)、やればいいじゃない。会社にも「やらせてください」って言って、なんならスポンサーにもなってもらって。

**遠藤** そうですね、部長、よろしく願います。

### 前向きな人に、社会は居場所を用意する

**太田** 伊藤真一と、青木拓磨と、太田哲也3人で、いつか「ハンディキャップーズ」って、トリオで耐久レースに出ようって、僕は言っているんですよ。

**遠藤** そのへんの健常者より全然速そうですね(笑)。

**太田** 例えば青木拓磨がレースをやりたいっていうと、誰かが集まってくる。もちろん本人が楽しい、やりたいっていうのがあるけど、それが求心力となって、人が動いてくれるんですよ。

俺の場合は、自分に居場所はないかもしれない、って三年間考え続けたから、社会への居場所っていうことを

よく考えるんです。社会に居場所を作るにはどうすれば

いいかっていうと、社会に何らかの貢献をしていれば、社会はその人をほっとかない。貢献しようとしている人に対して、社会がそこに居場所を用意してくれる。そういう原則があるような気がするんです。

**遠藤** 自分が塞ぎこんでると、友達とかは声かけづら

いなんです。でもクルマやりたい、っていうと、また人が集まってくるんですよ。

**太田** 僕が最初サーキットを走った時も、みんながそれで勇気をもたらってくれるとか、高校生のところに行った時も、みんな目を輝かせて話を聞きたがるとか。それはハンデを負った人のできる、有利な部分じゃないかな。もしかして走ったら、彼女が惚れ直すかもしれないよ。責任は持てないけど(笑)。

**遠藤** だいたいいいんですけど、こんなお話していたら、すぐ

にでもサーキットに行きたくなっちゃういます。

**太田** 前向きでいるとみんなは喜ぶよね。イチローみたいなスーパースターであろうが、一般人であろうがそれは変わらなくて。そう思うと、僕らにできることって、結構多いと思いますよ。

※1 僕の事故

1998年5月3日、富士スピードウェイで行われた、全日本GT選手権第2戦、決勝レース開始直後に起こった事故。前方で起こった多重クラッシュを避けるためにコース外に飛び出した太田さんの車が激しく炎上した。この事故で太田さんは全身に重度の熱傷を負い生死の境をさまよう。一命をとりとめたが治療には数年を要し、また後遺症として手足の機能障がいが残った。

※2 国内Aライセンス

JAF(日本自動車連盟)が主催する国内の自動車レースに出場するために必要となるライセンス。国内ライセンスにはAライセンスとBライセンスの2種類があり、複数の自動車と同時に競い合うレースに出場するためにはAライセンスが必要となる。

※3 ル・マン

「ル・マン24時間レース」のこと。フランスのル・マン近郊で行われる耐久レースで、24時間の周回数を競い合う。コースの大半は普段は一般道として使用されている道で、世界屈指の過酷なレースとして知られている。

※4 F3

車輪とドライバーがむき出しになっている「フォーミュラカー」を使用したレース種目で、「F1への登竜門」として知られる。日本では1974年から毎年「全日本F3選手権」が開催されている。

※5 伊藤真一

伊藤真一は、2003年にAライセンスを取得し、2005年に国内Aライセンスを取得。手術等の治療が終了した後、29歳で就職。34歳で結婚。

※6 青木拓磨

青木拓磨は、2003年にAライセンスを取得し、2005年に国内Aライセンスを取得。手術等の治療が終了した後、29歳で就職。34歳で結婚。

※7 太田哲也

太田哲也は、2003年にAライセンスを取得し、2005年に国内Aライセンスを取得。手術等の治療が終了した後、29歳で就職。34歳で結婚。

※8 伊藤真一

伊藤真一は、2003年にAライセンスを取得し、2005年に国内Aライセンスを取得。手術等の治療が終了した後、29歳で就職。34歳で結婚。

※9 青木拓磨

青木拓磨は、2003年にAライセンスを取得し、2005年に国内Aライセンスを取得。手術等の治療が終了した後、29歳で就職。34歳で結婚。

※10 太田哲也

太田哲也は、2003年にAライセンスを取得し、2005年に国内Aライセンスを取得。手術等の治療が終了した後、29歳で就職。34歳で結婚。



写真:岸本 剛

## 【車いすバスケットボール】

「ガッ」となにかがぶつかる音。とっさに音のする方を見たら、車いすが宙に浮いていました。スローモーションで流れる時間。次の瞬間、「ガシャー」と大きな音を立てて、車いすは床にたたきつけられています。ひっくり返った体勢のまま、なんとか起き上がろうとしますが、なかなかうまくいきません。まわりの選手の助けを借りて、なんとか起き上がることができました。怪我はないか、続けられるか。ゲームを中断して確認するかと思ったら、何事もなかったかのように、そのままオン・プレー。「激しい」とは聞いていましたが、車いすバスケがこんなに激しいとは思いませんでした。

ここは埼玉県所沢市にある「国立リハビリテーションセンター」。センター内の体育館で試合に汗を流しているのは、チーム「BLAST」。NTTクラリティに勤務す

る、山中さんと西原さんが所属するチームです。BLASTは、東京都葛飾区に本拠地を置き、たゞいま都のBリーグに所属、近い将来のAリーグ入りを目指して、練習に励んでいます。「選手一人ひとりの向上心がチームのレベルを上げていて、どんどん強いチームになっていると思いますよ」と西原さん。「でも、Aリーグは試合の頻度もレベルも激しさも段違いだから、大変な部分もありますけど」と山中さん。でもその目は、大きな期待とやる気に満ちているように見えます。

車いすバスケのルールは、バスケットボールと大きくは変わりません。5人1チーム、10分のピリオドを4回、合計40分間戦います。トラベリングについての規定が健常者のバスケットボールとは違って、プレイヤーはボールを保持したまま、2回までプッシュ(車いすのホ

ールを回すこと)ができます。

また、障がい具合によって各選手に持ち点があり、5人の総合計が14点以内で編成をしなければなりません。

車いすバスケも、バスケットボールもあまり観戦する機会のない私でしたが、車いすバスケならではの見どころを、2つ見つけました。まずは、車いす同士がぶつかり合う激しさ。冒頭のシーンのように、ぶつかった車いすが転倒するのは日常茶飯事。でも選手は、倒れることも恐れずに、果敢に立ち向かっていきます。倒れてしまったら、敵味方関係なく、近くの人が助け起こすのも、見ていて爽やかな気持ちになります。

もう1つの魅力が、車いすを華麗に操るテクニックです。ゴール前、車いすを集めてガチガチに固めた守備

の網の、その小さな隙間を、スピードに乗った車いすが華麗にすり抜けていくようすは、目が覚めるよう。

格闘技のような激しさと、ダンスのような華麗さと。車いすバスケ、一度その目で、ご覧になってみてはいかがでしょうか。

■BLAST <http://blast-wbc.com/>



# 格闘技のように激しく、 ダンスのように華麗に。



# お菓子作りは、まちづくり。

—お菓子で地域をつなげるプロジェクト—

futacolab

<http://www.futacolab.jp/>



見てください、このきれいなパッケージを。かわいいひもでくられた飾り箱の上には、いろんなデザインの、メッセージカードが貼られています。そして中身は、抹茶味や、いちご味など、いろんな味の焼菓子。口の中ではろりとける、柔らかな口触りの、甘くておいしいお菓子です。

この「HOROHORO ARTLINE(ホロホロ・アートライン)」を企画・開発したのは、地域デザインブランド「futacolab(フタコロラボ)」。

実はこのお菓子には、障がい者をはじめ、世田谷地域の様々な人たちが関わっているのです。レシピは、三軒茶屋で人気のパティスリー「Sonner(ソネ)」のパーティエ。そのレシピにしたがってお菓子を作るのは、等々力にある「社会福祉法人はる」が運営するお菓子工房「パイ焼き窯」。そしてパッケージに付属するアートカードの原画を描くのは、下馬の「世田谷福祉作業所」。パッケージデザインは、プロのデザイナーが手掛けています。売上の2パーセントは、アートを描いた、障がいのある人たちに支払われます。

「futacolab」を主宰する、株式会社グラディエの磯村さんが目指すのは、お菓子作りを通じた「まちづくり」。自身も二子玉川にお住いの磯村さん、「自分の住む地



域を、もっと魅力的に、住みやすきたい」という思いから、さまざまな立場の、さまざまなスキルを持っている人たちをつないで、地域で新しい商品を生み出す試みとして完成したのが、「HORORO ARTLINE」なのです。

さらに磯村さんが狙っているのは、オフィスの「置き菓子」需要。再開発が急速に進む二子玉川地区。次々と大きなオフィスビルが建ち、大企業が本社を移転する動きも出てきています。「futacolab」のお菓子を、働く人たちの休憩などに食べてもらいたいと、置き菓子用のケースも開発しました。「置き菓子の補充と料金回収には、地域の福祉施設に通う障がいのある人たちに担当していただくことを考えています」と磯村さん。そうすれば、自然と障がいのある人たちとの交流が生まれるのではないかと、という狙いです。これも「futacolab」が目指す、地域の人たちがお互いにかかわりあう関係づくりの一環となる。

もともとメーカーでプロダクトデザインを担当していた磯村さん。「医療機器のデザインを通じて、バリアフリーデザインやユニバーサルデザインの考え方に触れ、社会と福祉について考えるようになりました」。

メーカーを退職した磯村さんが向かったのは、北欧・

デンマーク。そこで磯村さんは、車いすや人工呼吸器なしには暮らすことのできないような重度の障がい者と、彼らをサポートする支援者がともに学びながら成長する学校に通い、障がいのあるなしにかかわらず一緒に学び、一緒に暮らしていく社会の素晴らしさを知ったといいます。

日本に戻った磯村さんは、プロダクトデザイナーとして活動しながら、福祉にとどまらず、様々な立場の人たちが関わりあい、助け合いながら暮らしていける地域づくりに関わりたいと、株式会社グラディエを立ち上げ、「futacolab」をはじめとする、さまざまな活動をはじめました。

株式会社グラディエでは「futacolab」の他にも、面白い取り組みをいくつか行っています。その一つ「ユルツナ」は、「ゆるいつながり」を意味する言葉で、都市化、高齢化の進む社会の中で、「血縁」や「地縁」といった昔ながらのつながりに代わる、新しいつながりを探していくという取り組みです。その中から生まれたのが「いいおかさんちであそぼ」。世田谷区二子玉川の空き家「飯岡さんの家」を活用して、子どもや、子育てにまつわる情報や悩みを持ち寄る交流スペースとしています。毎月第二・第四日曜日に行われるイベントには、若いお母さんと子どもはもちろん、地域に住んでいるおじいちゃん・おばあちゃんも顔を出し、まさに「ゆるいつながり」を作り出しています。

もう一つの取り組みが、新しい都市交通の仕組みを考えること。障がいのある人も、高齢者も、誰もが自由に、快適に街なかを移動できる社会を実現するために、「パーソナルモビリティ」と呼ばれる個人向けの移動機器が今注目を集めています。立ち乗りの二輪車「セグウェイ」などがよく知られていますが、そうした新しい技術を活用した、人にも街にもやさしい移動手段を考え、それが社会にゆるやかに、しかししっかりと根付いていくためにはどうしたらいいかを、ワークショップやイベントなどを通じて考えているのだそうです。

これらの磯村さんの取り組みに共通しているのは、「モノ」や「コト」を通じて、人と人をつなげていこうとしていること。大規模再開発や都市化などをチャンスと捉え、そこに新しいコミュニティを作り上げる。そのコミュニティの中では、障がいのある人もない人も、高齢者も子どもも、みんながまざって、つながりながら暮らすことができるのではないかと。このお菓子の箱から、そんな未来が見えてくるような気がしました。



# あなたのオフィスに スワンのパンは、いかが？

—障がい者が作って売るパン—

スワンカフェ&ベーカリー町田2号店

<http://homepage3.nifty.com/swan-macida/>



NTTクラリティ・神奈川料金問合せセンターは、横浜線「中山駅」から徒歩5分ほどの場所にあります。お客様からのお問い合わせに対応する忙しい毎日の中で、お昼休みの時間は、貴重なリフレッシュタイム。ランチは、働く人たちにとって大きな問題です。周囲には何店か飲食店もあり、また近くにコンビニもありますが、お弁当を持ってくる人、外に食べに行く人、さまざまです。身体障がいのあるメンバーもいますから、外に出ずにすませられれば、とい

うニーズは確かにあります。社員食堂はなく、仕出しのお弁当や、パン屋さんが入っています。このオフィスに、町田市の福祉施設が新たに参入することになりました。

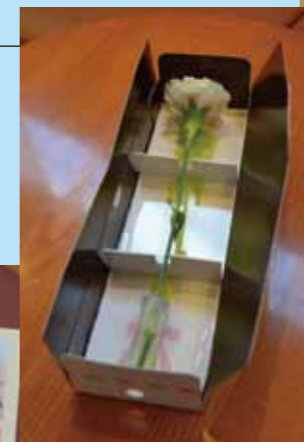
スワンカフェ&ベーカリー町田2号店は、一般社団法人ディーセントワールドが運営する就労継続支援A型施設。町田市の郊外にあるショッピングセンターにお店をかまえ、パンの製造・販売とイトインを行っています。岩手県宮古市の障がい者施設「カリー亭」で作って

# 手紙の代わりに、 一輪の花を、郵便で

—手紙感覚で贈れる花—

「はなささら」の「はなてがみ」

<http://www.hanasasara.com/>



ある日、家に帰ると、小さな、細長い箱が届いている。なんだろう。開けてみると、中には、一輪の花。離れて暮らす息子からだ。同封されたメッセージカードには「お誕生日、おめでとう」とだけ書いてある。いつもぶっきらぼうな息子だけど、ちゃんと誕生日、覚えていてくれたんだ…。

ネット専門のお花屋さん「はなささら」が企画・販売する「はなてがみ」は、手紙のような感覚で花を贈ることができるサービス。ウェブサイトでも贈りたい花を選んで、添える

メッセージを入力するだけで、速達で一輪の花を贈ってくれます。「はなささら」の代表・あずまみさんは「今よりも花を暮らしの中に気軽に取り込んでほしい」と、このサービスをはじめました。

あずまさんが仕事を辞め、フランスでフラワーアレンジメントを本格的に学んだのは、20代後半の時。花に対するフランスの人たちの考え方に驚かされたといいます。「バラの花束とか、普通に売られていますし、みんな日常生活で

るカレーと、パンを組みくみあわせたランチセットが人気です。

お店の営業とあわせて、訪問販売も精力的に行っています。近隣の学校やオフィスに出かけていって、障がい者と一緒にパンを売っています。

9月某日、午前10時。10時30分の開店を前にして、スワンカフェ&ベーカリー町田2号店の天野広美さんと、小宮依莉さんは、急いで準備をしています。この日持ってきたパンは、約80個。並べている間にも、どんどん人がやってきます。「いらっしゃいませ」「スワンベーカリーです、よろしく願います」。元気な声と笑顔で接客の小宮さん。聞くと、販売の仕事は今日がはじめてだそうです。とてもはじめてとは思えない、板についた笑顔と落ち着いた対応です。「いつもパンを作っていて、それはそれで楽しいのですが、お客様と直接触れ合うことのできる接客の楽しさは、また違いますね」。今後は週1回、販売を担当するというです。

次から次へとお客様がやってきて、販売部隊は品出しと接客にてんてこまい。結局、開店予定時間の10時30分には、ほとんどのパンが売り切れてしまいました。品切れを残念がるお客様もちらほら。「次回はもっとたくさんのおパンを、お持ちしなくては」と、うれし半分、反省半分の天野さん。

「スワンベーカリー」のように、学校やオフィスに訪問販売を行っている福祉施設は、実はけっこう多いのです。興味のある方は、一度調べてみるといいかもしれません。あなたのオフィスにも、おいしいパンは、いかが？

気軽に花を買って帰る習慣が身についている、と感じました」。また、お花屋さんのあり方にも感銘を受けたといいます。「よく考えてみると、花屋さんにも「フランス流」みたいな決まったやり方はなくて、それぞれが自分の思ったやり方で店を作っている。それが結果として、フランスの花屋さんの特色になっている、と感じました」。

日本に戻って、花屋さんで働いてみたけれど、やっぱりフランスのように、自分の好きなスタイルで花を売りたい。そう思ったあずまさんは、店舗を持たずにすみ、ネット専門の花屋さんを思いつき、はじめたのが「はなささら」。

「はなささら」の提供する商品には、ある一つの特長があると感じます。それは、花と一緒に贈る「気持ち」を演出する工夫があること。たとえば「はなてがみ」は、あまり花を贈る習慣のない日本人が、普段の暮らしの中、ちょっとしたことで花を贈る気持ちになれるような商品。

他にも、世界各地の街をイメージした花と、その街の写真と一緒に届く「はな旅」は、旅行の思い出や、なかなか旅行に行くことのできない人に、旅の雰囲気と一緒に届けことができます。

その究極が「TSUMORI」という企画。花を贈った「つもり」になって、その花の代金を寄付し、届け先には贈ったつもの花束の写真とメッセージカードが届く、というもの。非営利で行われる「TSUMORI」は、まさに「気持ち」だけを贈りあうような企画です。

「はなささら」の活動によって、日本でももっと気軽に、花を通じて気持ちを伝えあう習慣が浸透するといいな、と思いました。